雑　餉　隈　遺　跡　1

－雑餉隈遺跡群第１次調査－

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第276集

１９９２

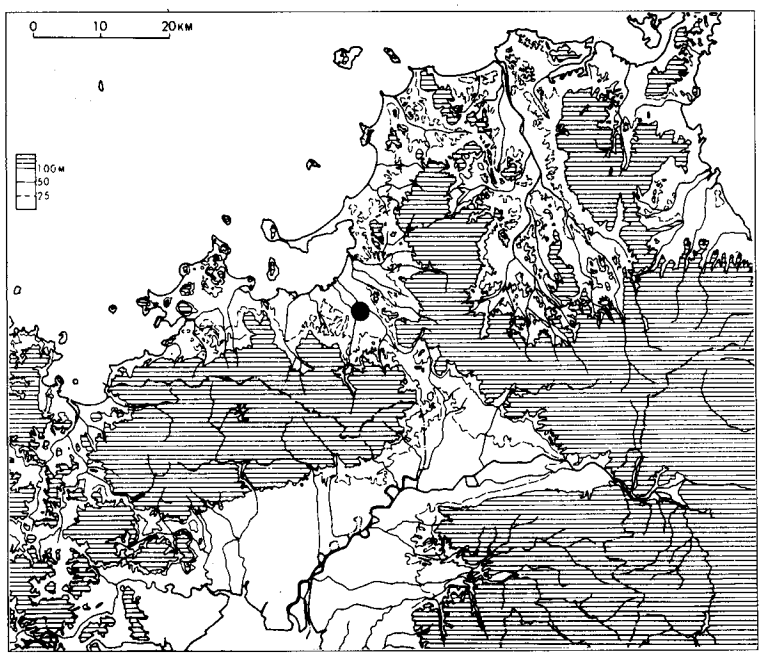
福岡市教育委員会

za ssyo no kuma

雑 餉 隈 遺 跡 1

－雑餉隈遺跡群第１次調査－

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第276集



遺跡調査番号9024
遺跡略号　　ZSK－1

1 9 9 2

福岡市教育委員会

序

農地の宅地化・高層ビル、マンションの建設、道路の整備、公園建設等、都市化の波は都心のみならず郊外にまで急速に押し寄せようとしています。こうした環境の変化のなかで新しいまちづくりも、そこに住む人々を中心に行なわれようとしています。

しかし、地上の都市化が地下に埋れた過去の歴史のうえに成り立つことは日常の生活のなかでは忘れがちです。福岡市では「海と歴史を抱いた文化の都市」を目標の一つに掲げ、未来に向かってまちづくりを推進しています。埋蔵文化財に対してもその保護と活用に努めているところです。

今回の調査は共同住宅建設に伴う事前調査として実施され、記録保存という形で文化財保護に努めることになりました。調査の結果、奈良時代の遺跡を発見し、同時期の集落が存在した周辺の調査成果に新たな資料を加え、集落全容の解明に向けての一助となりました。本書はこの成果を収めたものであり、埋蔵文化財に対する認識と理解、さらに研究上役立てば幸いです。

最後になりましたが、住友ホーム株式会社、新和町町内会長　石川浩二朗氏をはじめとする関係各位のご協力に対して厚く感謝の意を表します。

平成４年１月13日

福岡市教育委員会
教育長　井　口　雄　哉

例　言

1．本書は住友ホーム株式会社が予定した共同住宅建設に伴う事前調査として福岡市教育委員会が平成２年７月18日から同年８月25日にかけて実施した雑餉隈遺跡第１次調査の報告書である。

2．調査は福岡市教育委員会が主体となり、文化部(現、文化財部)埋蔵文化財課で総括、担当した。調査から報告書刊行に至るまで、多くの方々の協力を得た。

調査作業協力者　大神　嘉彦　山部　増人　仲田　忠孝　高田　　茂　的野　治郎
野口　公秀　永川カツエ　黒瀬　千鶴　嶋　ヒサ子　永松トミ子
野中　雅子　本多ナツ子　松浦ウメノ　安高　久子　山下　智子
山村スミ子　山本　后代　有田まき子　宮原つや子　杉山　至道
川浪　亮一　橋本　順一　池見　恭子　安部　国恵　小西　千晶
片野ゆき子　山口　英子　(敬称略)

3．本書の編集、執筆は荒牧が行なった。

4．遺構の写真撮影、実測は荒牧が中心に行なった。

5．本書に掲載された遺物は荒牧、管波が行い、浄書を蜂須賀博子に依頼した。

6．本書に使用した方位は磁北である。

7．発掘調査によって得られた記録類、出土遺物は福岡市埋蔵文化財センターに保管、収蔵される予定である。広く活用される事を願います。

遺跡調査番号	9024	遺跡略号	ＺＳＫ－１
調査地地籍	博多区新和町二丁目10-2、10-6	分布地図番号	13(雑餉隈)
開発面積	500m²	調査対象面積	500m²
調査期間	900718～900825	調査面積	262m²

本文目次

第１章　はじめに
調査の経過と方法……1
１）調査・報告書作成までの経過……1
２）調査・記録の方法……1
３）調査の概要……1
第２章　位置と環境……2
１）位置……2
２）歴史的環境……2
第３章　調査の記録……4
１）旧地形と土層……4
２）遺構……4
SK01 ……4
SK02 ……4
３）出土遺物……5
第４章　まとめ……9

挿図目次

Fig. 1　周辺遺跡位置図（１／25,000）……1
Fig. 2　旧地形図（明治30年代、1／20,000）……3
Fig. 3　遺構配置図（１／400）・調査区北壁土層図（１／80）……5
Fig. 4　SK01, SK02実測図（１／40）……6
Fig. 5　SK01出土遺物実測図（１／３）……7
Fig. 6　SK02出土遺物実測図（１／３）……7
Fig. 7　表土・試堀時出土遺物実測図（１／３）……8
Fig. 8　表土出土石器実測図（１／３）……8
Fig. 9　雑餉隈と周辺遺跡群（１／4000）……10

Fig. 1 周辺遺跡位置図 (1/25,000)

第１章　はじめに

調査の経過と方法

(1)　調査・報告書作成までの経過

本調査地点は福岡市博多区新和町二丁目10番２号及び10番６号に所在する。雑餉隈遺跡群の西側に位置していたが、遺跡の存在によって範囲変更を行い、この遺跡群に含めることになった。従って、本調査は雑餉隈遺跡群の、第１次と呼称する。

平成２年１月５日、森田雄次さんより事前審査願が教育委員会文化部(現、文化財部)埋蔵文化財課に提出された。この申請に基づいて書類審査を行い、試堀を行うことになった。試掘は同年１月16日に実施し、遺構が確認された。その後協議を重ね、同年７月18日に調査に至る運びとなった。調査は盛夏厳しいおり行い、同年の８月25日に終了した。その後図面・写真等の記録類、及び出土遺物の整理にかかり、今回、報告書を刊行することになった。

(2)　調査・記録の方法

本調査地点の現況は標高22.60mの平坦地を為している。周辺に比べ高台に位置し、特に南側の隣接地は外壁を境に約２m段落ちしている。

調査範囲は敷地の全面を予定していたが、周囲外壁から約１mの引けとユニットを設置した部分は遺構の分布状況から判断して除外した。

調査は先ず、バックホーで地山の上に推積する客土、包含層を除去することからはじまった。この表土剝ぎ作業は廃土を搬出した事により調査区のほぼ全面を行なうことができた。続いて、人為による遺構発掘作業にかかり、図面作成も随時平行して行なった。

図面作成のための基準は調査区の平面形に合わせその中央を通し、さらに２mグリッドを組んだ。遺構配置図は１／20と現況図を兼ねた１／200の縮尺で行なった。

(3)　調査の概要

検出された主な遺構は奈良時代の土壙２基であった。集落の中心から離れているために遺構の密度は希薄である。しかし。周辺に分布する南八幡遺跡群、麦野遺跡群に立地した奈良時代の集落の広がりを追う事ができた。

第2章　位置と環境

1．位置

本調査地点は福岡平野の奥まった南部に位置する。福岡平野は北方の玄海灘に開いた海岸平野で、中位段丘面の台地部と周辺の沖積部で構成される。

台地部は南は春日市の須玖付近から北は博多まで求心的に延びていく。台地周縁部は開析が著しく出入りが複雑である。従って、派生する台地も細長く断続的である。

沖積部は主に那珂川と御笠川の汎濫堆積層から成る。両河川ともに蛇行が著しく、度々流路を変えたものと推察される。

2．歴史的環境

福岡平野は大陸と近い地理条件のもとに古代より文物の流入、文化の受容はいち早い。上記の台地部には旧石器時代より連綿と遺跡が営まれている。ここでは特に「奴」国の中心として繁栄した弥生時代と本調査の奈良時代について簡単に触れておく。

弥生時代、特に中期以降、南の須玖岡本遺跡を中心とした須玖丘陵では青銅器、青銅器鋳型の比類を見ない出土量の多さにその繁栄ぶりが伺われる。大谷、赤井手の青銅器生産集落、須玖岡本遺跡の前漢鏡30面内外出土の甕棺を中心に赤井手、一の谷、伯玄社の甕棺墓群、48本の銅弋を一括埋納した原遺跡等、列挙にいとまない。また北側の比恵・那珂丘陵でも環濠集落の検出とともに青銅器とその鋳型の出土を多くみるようになった。

こうした弥生の拠点集落は那珂川と諸岡川の間に挟まれた台地部に位置し、当遺跡が立地する諸岡川右岸の雑餉隈、南八幡、麦野遺跡では遺構の密度が疎である。

古墳時代以降、特に奈良時代ではこの3遺跡群に集落が急速に広がる。しかし、検出された遺構は後進的な竪穴住居跡群が多い。周辺では大型掘立柱建物跡、人面土器、墨書土器等が発見された仲島、井相田遺跡、さらに三宅廃寺、高畑廃寺が位置し、太宰府－鴻臚館に通じる官道の問題も含めて注目される。

1．比恵遺跡　2．那珂8次　3．那珂八幡古墳　4．那珂沼口遺跡　5．那珂7次　6．那珂深ヲサ遺跡　7．9那珂君休遺跡　8．那珂久平遺跡　10．板付遺跡　11．板付南遺跡　12．高畑廃寺　13．金隈遺跡　14．諸岡遺跡　15．高畑遺跡　16．麦野下古賀遺跡　17．井相田C遺跡　18．仲島遺跡　19．井尻大塚古墳　20．三筑遺跡　21．南八幡遺跡1次　22．トヲナシ遺跡　23．南八幡遺跡2次・3次　24．須玖岡本遺跡　25．弥永原遺跡　26．日佐原遺跡　27．伯玄社遺跡　28．原町遺跡　29．大南遺跡　30．大谷遺跡　31．一の谷遺跡　32．赤井手遺跡　33．雑餉隈1次

A．那珂遺跡群　B．諸岡A遺跡群　C．諸岡B遺跡群　D．板付遺跡群　E．井尻B遺跡群　F．仲島遺跡群　G．井相田A遺跡群　H．麦野A遺跡群　I．麦野C遺跡群　J．井相田B遺跡群　K．麦野B遺跡群　L．南八幡遺跡群　M．雑餉隈遺跡群

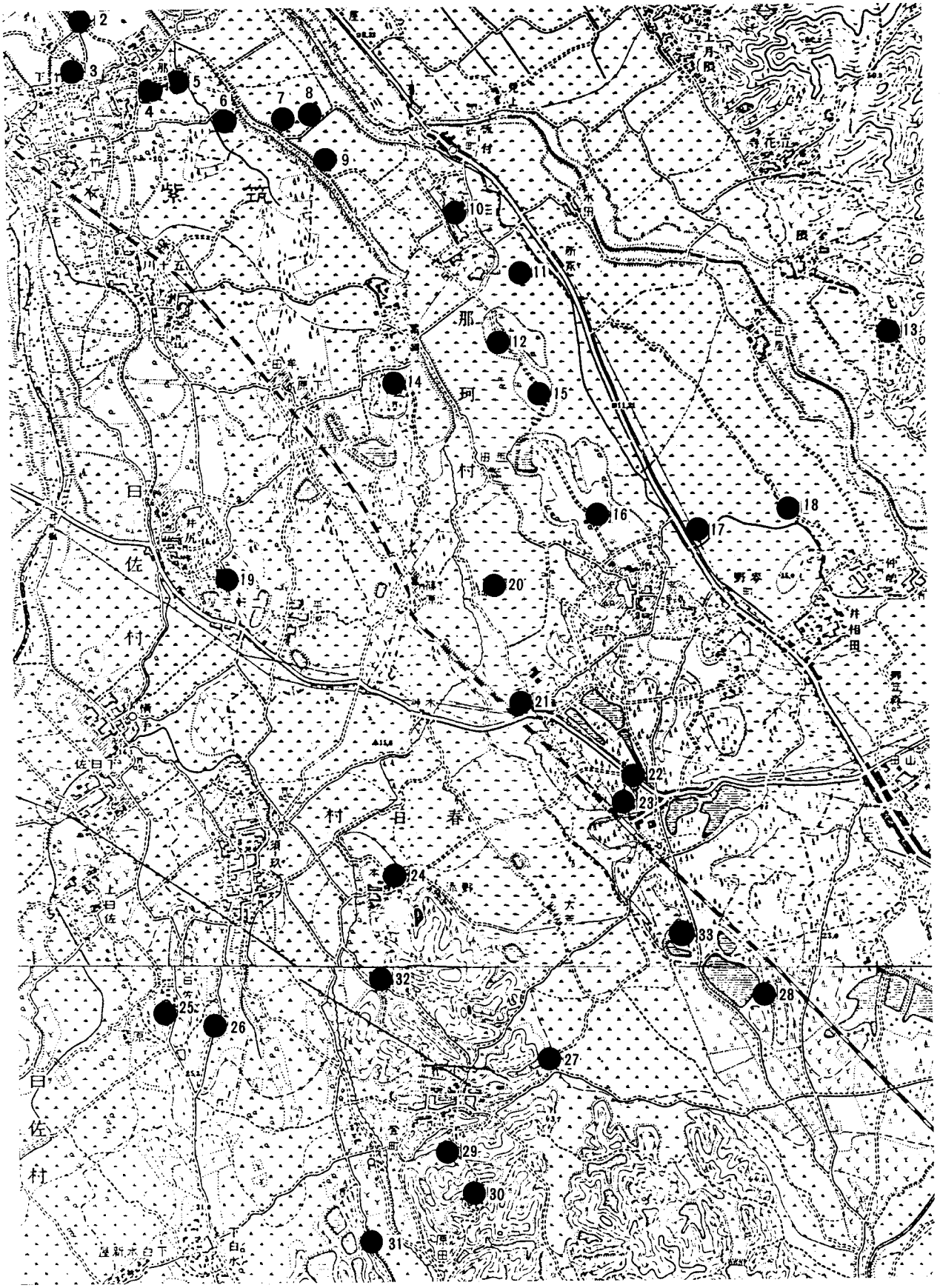


Fig. 2　旧地形図(明治30年代、1/20,000)

第３章　調査の記録

１）旧地形と土層

本調査地点の立地する雑餉隈遺跡群は、先述のとおり既往の調査例が無く旧地形を復元するには資料が少ない。しかし試掘資料、過去の地形図から復元すれば当地付近に東から延びてくる狭い台地部が広がり、北東方向は開析谷が深く抉り込むと予想される。(Fig. 9 参照) また南側にかけては当地から台地が下降していく。

調査地点で観察された土層は、この台地が南側に落ちていく様相を良好に示していた。調査区北半ではGL－170cmまでの客土直下に地山の赤褐色の鳥栖ロームが堆積する。ロームの上面標高は調査区北側の最高所で21.76mを測る。

調査区南側ではロームが比較的、急な下降をみせる。最低所の南西隅でローム上標高20.40mを測る。調査区南西部ではロームの上に黒色有機土が約30cm堆積する。この層は近辺の南八幡遺跡、麦野遺跡でもよく見られるもので、遺物はほとんど含んでいなかった。

２）遺構

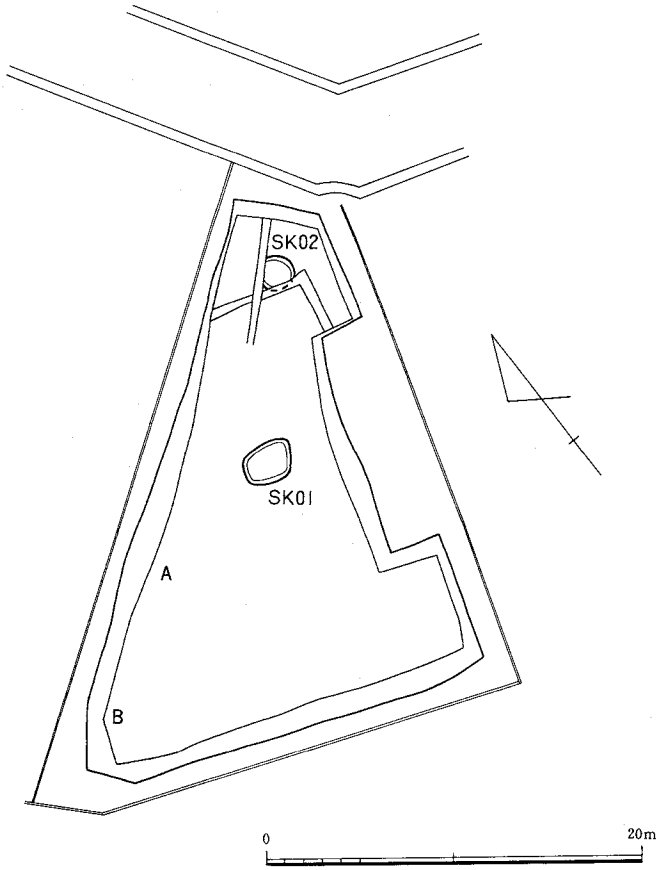
調査区北半は幾分、削平を受けているものの南半では遺構が存在すれば良好に残ると考えられた。しかし、検出された明確な遺構は土壙２基のみである。調査区全面にわたって薄い黒色を呈した染み状の落ち込みが多く認められた。円形プランに近いものもあり、柱穴の可能性があることから発掘した。しかし、大半が輪郭不明瞭で掘り進むと横に入り込むものなど堀り方がはっきりせず、木の根等によるものと判断した。

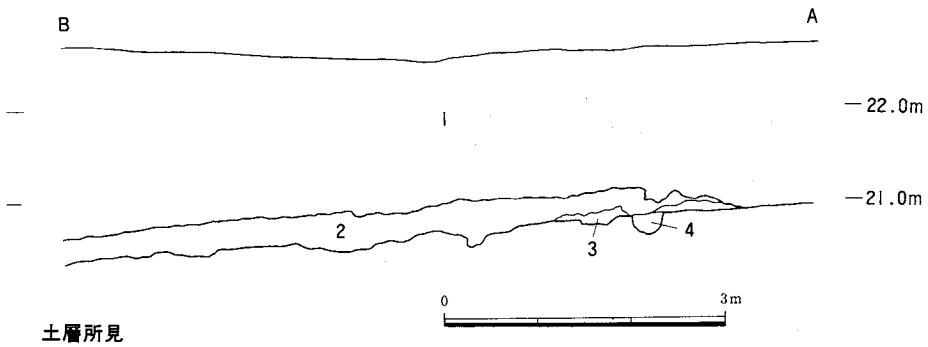
ＳＫ－01

調査区の中央部で検出された。長辺2.2m、短辺1.8mを測る歪な隅丸長方形プランを呈す。北西隅が湾曲して移行するためコーナーが不明瞭となる。深さは25～40cm遺存し、基底面は凹凸が大きいがレベル的には等しい。北西部から中央部にかけての基底面に灰色粘土やばらついた焼土が検出された。覆土は上層がロームの細粒を含む黒色土、間層に帯状の明黄褐色ロームが断続的に入り、最下層に黒色土が堆積していた。遺物は上層の黒色土から出土し、その出土状態も土層と同じくレンズ状の自然な流入と考えられる。

ＳＫ－02

調査区の北際で検出された。排水管の埋設抗によって破壊を受けているが、およそ径1.90mの円形プランを呈すと考えれる。深さは約20cmで基底面は少し凹凸がみられる。埋土は均一の黒色土である。





土層所見

1. 造成土(マサ、コンクリガラ、盛土)
2. 黒色土
3. ローム混り黒色土
4. ローム細粒混り黒色土(柱穴埋土か)

Fig. 3　遺構配置図 (1/400)・調査区北壁土層図 (1/80)

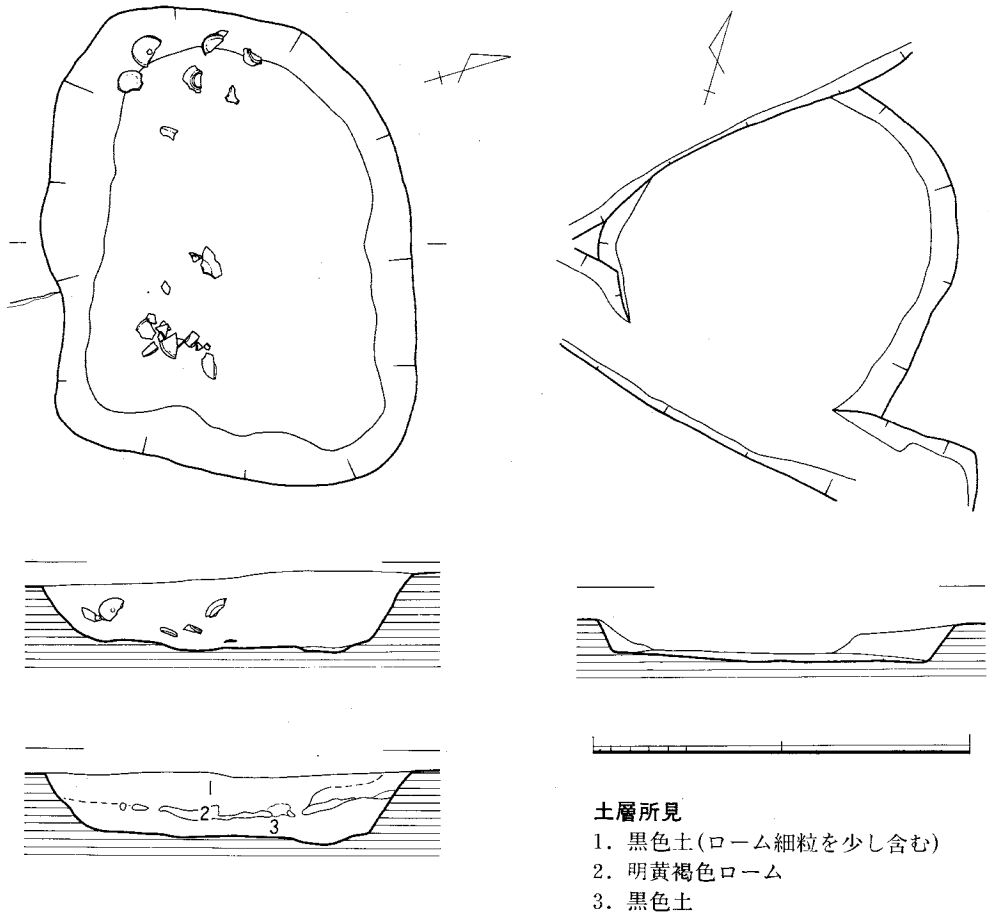


Fig. 4　ＳＫ01.02実測図（1/40）

3）出土遺物

ＳＫ－01

土器は南側に偏って出土した。大半が上層の黒色土からである。１～４は土師器、５～７は須恵器である。**1**は口径21.5cm、器高3.6cm、撮み径2.7cm、撮み高0.8cmを測る。天井部にかけて少し高くなり、口縁部はやや開き端部は丸く収める。外面体部１／２以上に回転ヘラ削り調整を施す。その後口縁端部と撮み付近を除く体部全体にロクロ回転を利用したヘラミガキで仕上げる。内面もロクロ回転を使ったヘラミガキが体部全体に施される。橙色を呈す。２、３は同様の器形、大きさのものである。**2**は復元口径23.8cm、器高2.4cmを測る。天井部は平担で、

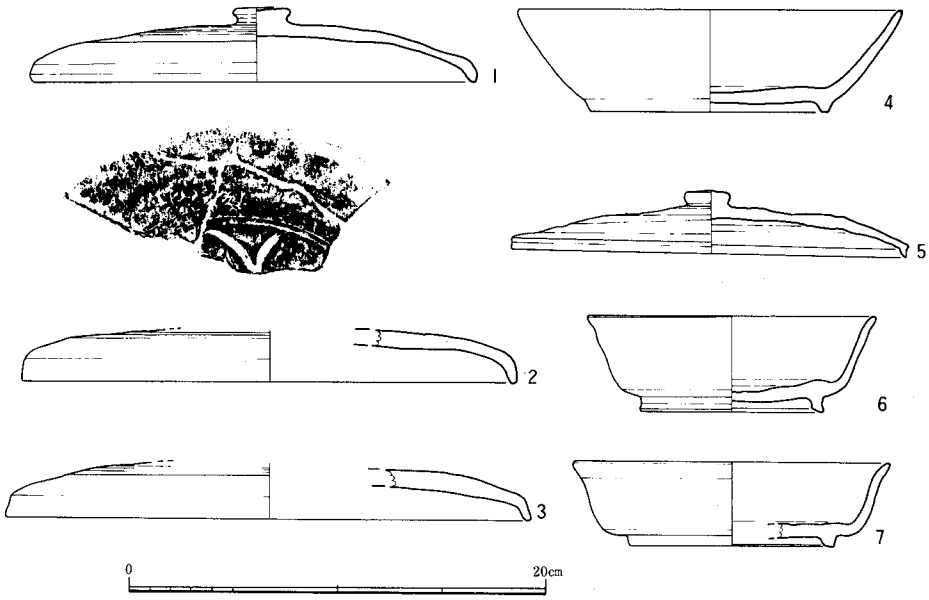


Fig. 5　ＳＫ01出土遺物実測図（1/3）

外面にヘラ記号の一部が残る。内外面の調整は１と同じである。**3** は口径25.2cm、器高2.4cmを測る。外面体部２/３に最初の調整である回転ヘラ削りを施し、弱い稜を有して口縁部の方へ移行していく。**4** は復元口径18.6cm、器高4.9cm、高台径11.6cmを測る。底部は平たく、底部と体部の境に接地面が丸みを帯びた高台を貼りつける。体部は直線的に外側へ延びていく。口縁端部は丸く収める。内外面にロクロ回転を使った細かいヘラミガキが認められる。**5** はほぼ完形品である。口径19.2cm、器高3.3cm、撮み径2.2cm、撮み高0.7cmを測る。体部１/２強に回転ヘラを削り施し、稜を有して口縁に下降していく。口縁端部は断面三角形を呈す。天井部のほぼ中央に扁平でわずかに中央を摘み上げた宝珠形の撮みが貼りつけられる。内面の体部１/２弱まで静止ナデを加える。**6** は復元口径14.0cm、器高4.7cm、高台径8.8cmを測る。底部はやや丸みをおび、底部と体部の境は湾曲して移行するため不明瞭である。体部は直線的に外側へ開き、口縁近くで外反する。**7** は復元口径15.4cm、器高4.1cm、高台径10.0cmを測る。底部は平たく、底部と体部との境は不明瞭に移行する。体部は内湾しながら上方へ延び口縁近くで外反する。高台は低い断面台形を呈し、底部のやや内側に貼り付けられる。

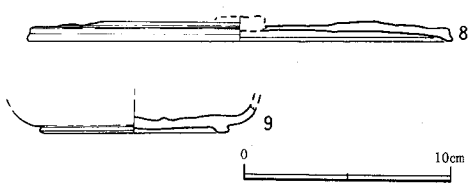


Fig. 6　ＳＫ02出土遺物実測図（1/3）

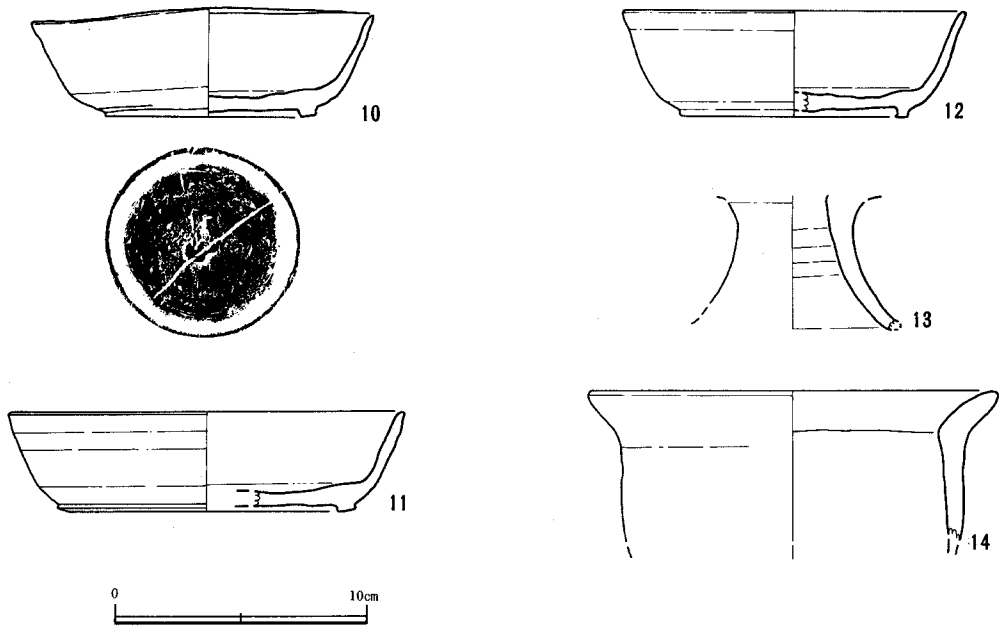


Fig. 7　表上・試掘時出土遺物実測図（1/3）

ＳＫ－02

８，９ともに須恵器である。**8** は口径20.8cm、器高1.0cmを測る。天井部が焼き歪みの為に陥没している。撮みは欠損する。口縁端部は断面三角形を呈す。外面の折り曲げた面はM字状に凹む。外面天井部にハケ目状の刷痕がかすかに残る。**9** は高台径9.0cmを測る。底部は平たく、底部と体部との境は不明瞭である。高台は低い菱形に近い断面形を呈す。

表土・試堀時出土遺物

13、15は表土剝ぎ時に出土。他は試堀時に出土し、SK01の遺物である可能性が高い。

10は焼き歪みを生じているが口径13.5cm、器高4.0cmに復元できる。外底部に１条のヘラ記号を有す。**11**は口径15.6cm、器高4.0cm、高台径11.6cm、**12**は復元口径13.4cm、器高4.2cm、高台径9.0cmを測る。10～12は器形、高台の貼りつけ位置など類似し同時期のものと考えられる。**13**は土師器の脚部である。図示した最下で屈曲し外方へ広がる。**14**は土師器の小形の甕である。**15**は砥石で火熱を受け赤変している。

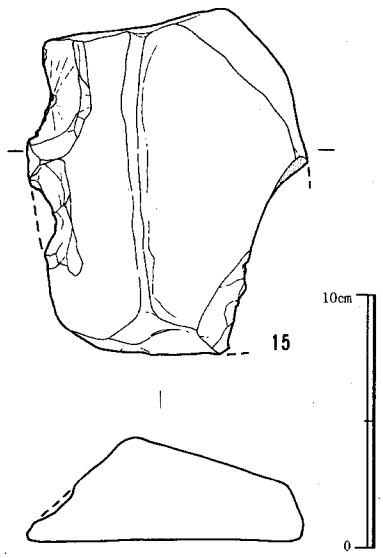
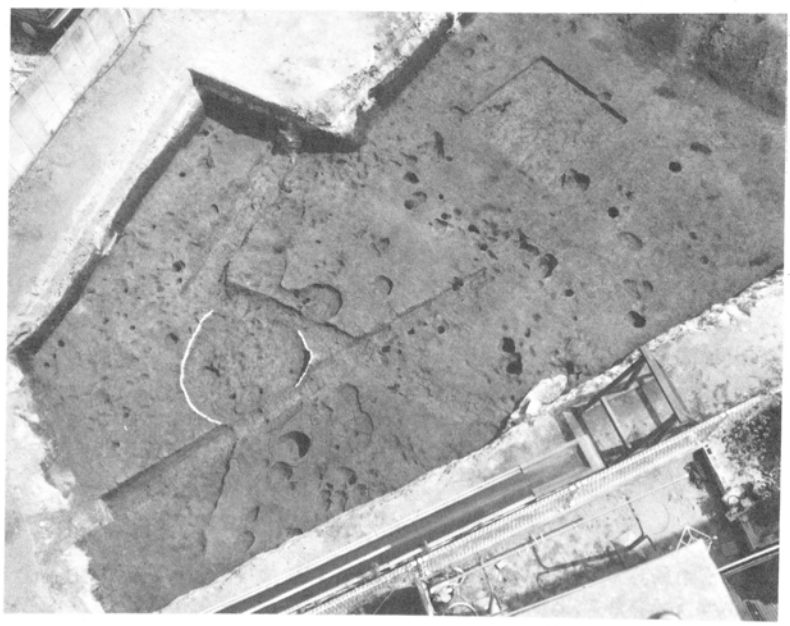


Fig. 8　表上出土石器実測図（1/2）

第4章　まとめ

検出された遺構が集落の外れに位置するの為か少なく、語ることがこの地点のみではできない。従ってこの項では周辺の調査成果をふまえて集落の分布について若干述べておく。これについては第2章でもいささか触れており重複する部分もある。

本遺跡が立地する雑餉隈遺跡は近接する南八幡遺跡、麦野遺跡とともに台地周縁の開析が著しく出入りの多い八手状を呈する(Fig 9)。試堀の資料を加えると、当地点の南西部には谷が近くまで迫り、外方に大きく開口している。すなわち本調査地点は狭い台地に展開した奈良時代(8世紀後半以降と考えている)の集落の外れに位置する可能性が高い。周辺の南八幡遺跡群第2次、第3次調査、麦野B遺跡群第1次調査、麦野C遺跡群第1次調査では6世紀後半代と8世紀代に限られた竪穴住居跡が検出されている。奈良時代の井相田遺跡では先進的な堀立柱建物が主流を占め対照的である。これは先の3遺跡群が弥生時代に、須玖岡本遺跡と那珂・比恵遺跡に狭まれながら発展をあまり見ないこと、遺跡が営まれている時期が限られることなど水利を含めた地形的な要因と関連するように思える。さらに推測を重ねれば造成を含めた土地改良がおこなわれた時代のみ集落として営まれたのではあるまいか。



調査区北半全景（北から）

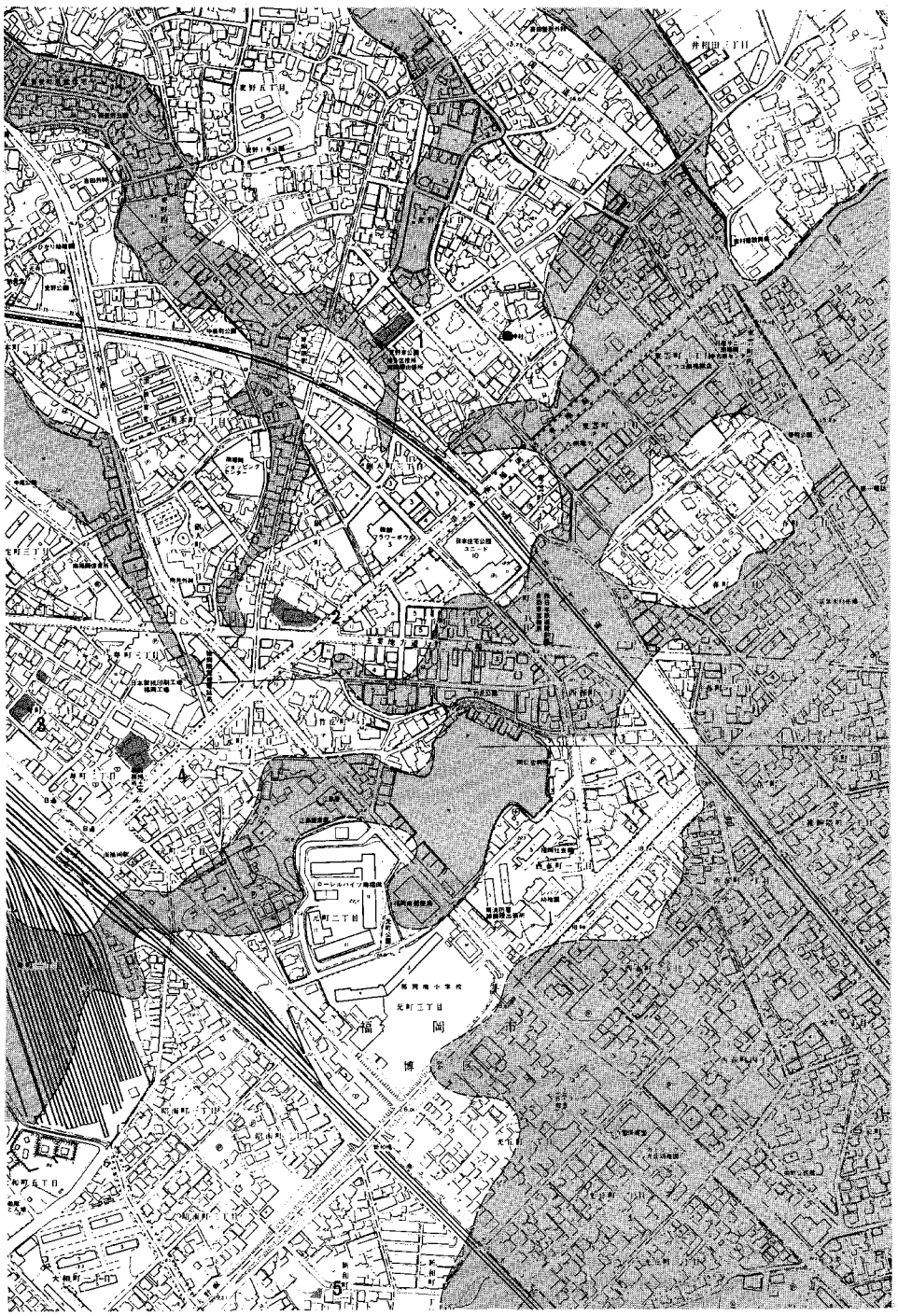


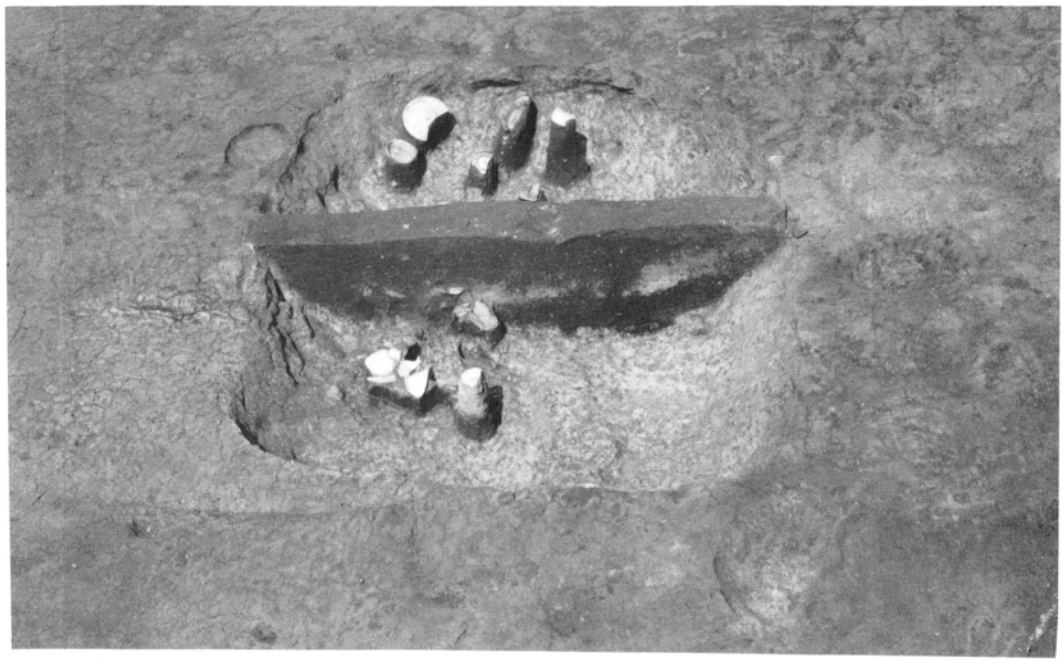
Fig. 9　雑餉隈とその週辺遺跡群 (1/4,000)

1.麦野C遺跡群第1次　2.麦野B遺跡群第1次　3.南八幡遺跡群第1次
4.南八幡遺跡群第2、3次　5.雑餉隈遺跡群第1次

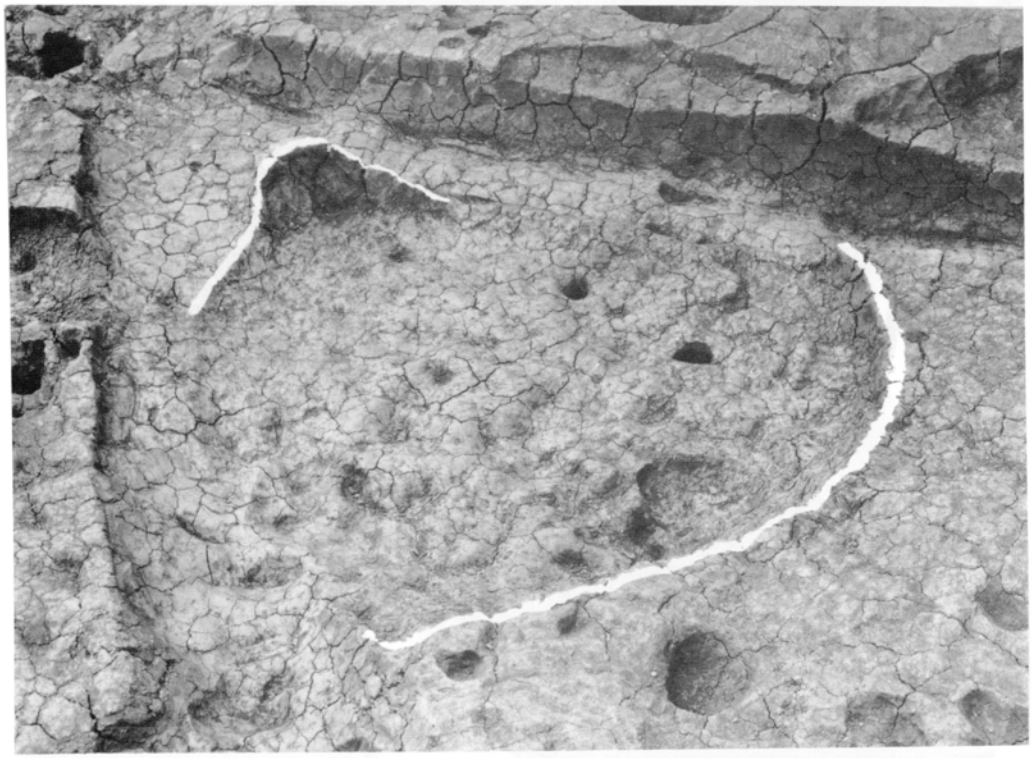
図　　版

(PLATE)

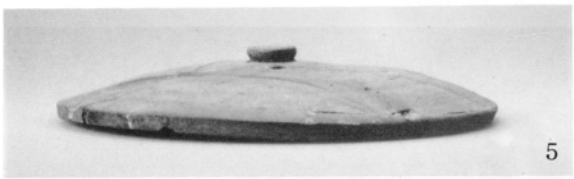
調査区全景（北から）

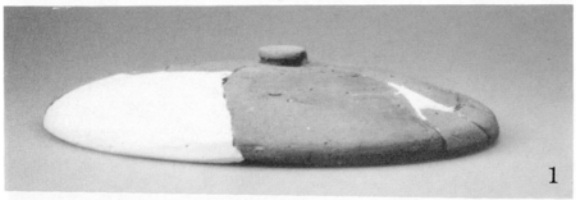


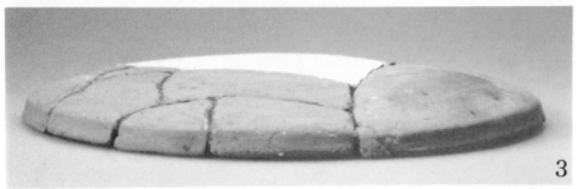
ＳＫ01（東から）

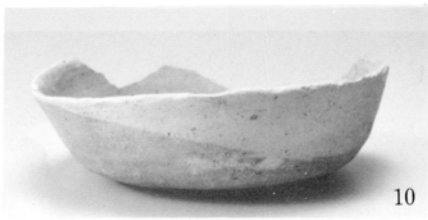


ＳＫ02（北から）









ＳＫ01・表土出土遺物

雑 餉 隈 遺 跡 1

－雑餉隈遺跡群第１次調査－

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第276集

平成４年３月15日

発　行　福岡市教育委員会
　　福岡市中央区天神1丁目7－23

印　刷　(株)ミドリ印刷
　　福岡市博多区西月隈1丁目122－4